

## 研究結果報告書

所属 延世大学  
役職 非常勤講師  
氏名 李セボン

### 研究結果

#### 明治日本における「自由」観の変遷研究

本研究は、明治初期の知識人が「自由」を論じる際に置かれていた政治的・社会的文脈について考察したものである。とりわけ、福沢諭吉(1835 - 1901)や 中村正直(1832 - 1891)のように、植木枝盛(1857 - 1892)の先行する世代の1870年代における議論に焦点を絞る。「文明開化」論を牽引したいわゆる「天保の老人」世代に当たる中村と福沢と、その後続世代である自由民権運動の旗手植木の「自由」論では、それぞれ置かれていた重点が異なる。そして世代の違いは、「自由」を求める文脈の差異に繋がる。

明治初期の「自由」論の流行は、まず世襲身分制からの解放がもたらした社会的変化に起因するところが多い。本研究では、こうした社会制度の変化によって生まれた「自由」概念の理解から、政治的な「自由」概念をめぐる理解、とりわけ政府と人民の関係(社会契約)を捉える文脈を再構成することに努める。例えば、J. S. ミルの『自由論』を和訳した中村の「自由」理解において「天」の存在への信念を前提にしていたことの意味は、同じ世代に当たる福沢が徳川時代の世襲身分制社会における個人の意志への抑圧を強く意識し、職業選択の「自由」の重要性から出発しつつ、ミルの『自由論』における人間の「個性」の尊重と多様性の重要性を強調したことと軌を同じくする。福沢は、その延長線上で、natural libertyとcivil libertyの境界を決定づける要素として社会契約を不可欠とみなし、政府と人民の間で交わされた約束として「遵法」を説くのであった。

しかし、明治初期の文明開化論の洗礼を受けて「天賦自由」の思想を展開した植木は、先行する世代の「天」を起源とする人間の本性論を受け継ぎつつも、そこから導出される社会契約の論理を離れたという特徴を見せる。以上の分析結果は、中村や福沢のような「一身二生」の世代が受けた儒学教育が西洋政治思想の理解において及ぼした影響の型ともいえるべき「天」論の構造が、後続する世代では最早維持されなくなったことを意味する。

研究成果の公表について(予定も含む)

口頭発表 (題名・発表者名・会議名・日時・場所等)

論文 (題名・発表者名・論文掲載誌・掲載時期等)

「身分制と明治維新：福沢諭吉の「自由」論がおかれたコンテクスト」・李セボン・『韓国東洋政治思想史研究』22(1)・2023年3月

書籍 (題名・著者名・出版社・発行時期等)